

## 自我心理学とラカン

広瀬 春次

本論文では、精神分析的自我心理学とラカンの精神分析との間にある2, 3の論点について検討する。特にJ. H. Smithの最近の著書(1991)に基づき考察を進めるので、自我心理学の立場からラカン思想を捉えることになる。

ところで精神分析学の歴史における様々な方向への展開並びに対立や混乱は、創始者フロイドの基本的概念構造の矛盾の反映であるように思える。彼は症例と考察を通して、事実と一致する方向での理論の再編成を絶えず試みている。

私に言わせれば、これこそまさに思弁的理論と経験の解釈のうえに築かれている学問とのあいだの相違なのである。...後者は...むしろ曖昧模糊とした、ほとんど表象しえないようないくつかの基本的思想で満足するであろうし、それらを展開の途上でいつそう明らかに把握しようと望んではいるが、場合によっては、それらを他の思想と交換することも辞さないのである。(フロイド著作集5, 112-113)

ラランシュとポンタリス(1967)は、精神分析における多様な概念についての詳細な記述を行っているが読者の多くは、それらの基本に曖昧な何か、未解決の何かが横たわっていることに気づかれると思う。従って、上述の論点を考察するとき、フロイドの思想への言及が避けられないことは言うまでもない。

### 無意識と一次過程

Smithは、「無意識は言語の<sup>・</sup><sub>・</sub><sup>・</sup>ように構造化されている」というラカンの主張を何度も取り上げている。これは「無意識は言語によ<sup>・</sup><sub>・</sub><sup>・</sup>って構造化されている」という同じラカンの主張とは意味が異なる。彼は、無意識並びに原始的思考の特徴である一次過程の思考あるいはイメージは一種の言語過程あるいは記号であり、話される言葉の先駆をなすものだと考えている。即ち、一次過程はランダムなものではなく言語のように組織化され意味を持ったプロセスである。それは、一次過程も言語も、それらを貫く共通の規則体系、即ち快感原則<sup>1</sup>の支配下にあるからである。

行動の究極の規則、すべての行為を支配する規則、ことばの全領域は快感原則である。現実原則は異なった原則ではなく、構造が変化した条件での同じ原則に他ならない。(Smith 1991: 3)

チョムスキーは、言語の背景に、文の形や意味を決定する複雑な心的計算を可能にする無意識の思考過程が存在することを示唆している。ピアジェも、内外の変化により困難に直面した生体が行為の再調整（困難な条件を同化できるような高次の認知構造への変容）により均衡を回復するといった、普遍的なものとしての快感原則に通じる均衡の概念を提起している。

そもそも、フロイドにおいて一次過程が支配する無意識の世界は、心的エネルギーが束縛されることなく自由に流れる一種の混沌と言うべき状態に近いものである。その結果、ある表象に結びついたエネルギーが連想の様々な結びつきを通して他の表象と結びつく置き換えの現象や、いくつかの表象がそこで結びつくような一つの表象に心的エネルギーが集中する圧縮の現象が生じる。このような無意識の世界は、連想が自由に飛び交う夢の世界に他ならない。フロイドが無意識の王道を夢分析にみたことは当然のことと言える。また、前意識―意識系の特徴である二次過程に関して、フロイドは表象間の関連性に従って連想が進行する合理的のプロセスと考えている。そこでは心的エネルギーは延期といった形で拘束され、計画に従って制御される。フロイドにおいて一次過程から二次過程への移行は組織化、構造化の漸進的プロセスである。

これに対して、ラカンが、無意識は言語であるとか、さらには意識以上に象徴秩序に対して開かれていると主張する。フロイドが一次過程の特徴とみなした置き換えと圧縮は言語における換喩と隠喩の機制に他ならない。それは意識的な言語においてもふつうに見られる機制である。ラカンにとって人間のコミュニケーションの基礎と考えられる意味の固定性、記号表現と記号内容の間の固定性は幻想である。ソシュールの記号式  $S/s$  で示される記号表現 ( $S$ ) と記号内容 ( $s$ ) の間の横線は、 $S$  の  $s$  に対する自律性や横すべりを示している。

無意識に意識的世界と同じような言語構造をとらえるラカンの主張と無意識は一次過程に従い、イメージによって構成されている<sup>2</sup> というフロイドの主張は両立しないように見える。しかし、Smith は、先に述べたように一次過程あるいはイメージが構造と意味を持つ場とみなすことで両者を統合しようとしている。彼によれば、一次過程において、知覚されたものとイメージされたものの分化、自己と他者の原初的分化、予期や主体の前体制などその後の進歩した構造の萌芽がみられる。一次過程の特色である圧縮と置き換えは、決してランダムなものではなく意味体系としての世界への調整を意味する。さらにイメージは広い意味での言語であり、その条件に即して快感原則に導かれた自身の法則（換喩、欲望、共生的関係様式など）を持っている。イメージが一つの象徴であることはピアジェによって示唆されている。

イメージは、こんなにちよく知られているように思考そのものの要素でもなく知覚の直接の連続でもない。イメージは対象のシンボルなのだ。そこでわたくしたちは、言語よりも広く、かつ言語記号体系の外側で狭義のシンボル体系を包むシンボル機能が存在することを、みとめることができる。(Piaget 1964: 117)

## 原抑圧

フロイドは、欲動の心的代表が意識に入ること拒否される最初の抑圧を原抑圧と呼んでいる。彼によれば、原抑圧では抑圧されたものは原始的で未分化な精神状態にあって意識されたことはなく逆備給によってのみ無意識にとどまる。一方、二次的抑圧の場合は表象からの備給の撤回と逆備給というふたつのプロセスが必要となる。

ラカンにおいては、原抑圧、ことばの習得、エディプス状況の三者は密接な関連性をもっている。エディプス期は母と子との想像的・共生的な二者関係から、父の影響のもとに、媒介的な三者関係あるいは象徴秩序への参入を意味する。子どもは父によって母子の共生的関係を禁止され、母の欲望の欲望（全能のファロスであること）を放棄し、自己限定（言表され、制限された欲望をもつこと）を余儀なくされる。こうして子どもの真の欲望（欲動）は、記号表現によって置きかえられ、無意識にとどまることになる。これがラカンの原抑圧である。

しかしながら、我々はこれら三者の時間的ずれを無視することはできない。まずエディプス期に先だって言語が習得されるのは常識であろうし、言語が習得される前に象徴機能が現れる可能性は高い。だとすれば、エディプス期を象徴の秩序にはいる条件とみなすことはできないし、言語の習得が原抑圧をもたらすと結論づけることもできないであろう。ラカン派のルクエールは、差異についての感覚的経験（例えば、快と不快）と平行して対立的な象徴や文字が現れる時に原抑圧が発生すると考えている。これはエディプス期はもちろん、ことばが話されるよりも前の段階を問題にしている。Smith も原抑圧を、前言語的ナルシズムや自我統合が達成される前の、増大する興奮としての危険からの初期の回避の時期に置いている。

心的不均衡（最初の代表、母子相互作用において欲動として構成されるもの）は、危険なものとして、その不均衡からの回避と対象のイメージ（第2の代表、欲動を代表するイメージ）の追求をひき起こす。（Smith 1991：25）

Smith は、例えば、母親不在のさいのこのような幻覚的な欲求充足は、人間の赤ん坊の未熟性ゆえの危機の緊迫性によるものと考えている。しかし彼によれば、このようないつわりの結合こそが意味する者としてのイメージと意味されるものとしての対象の結合を可能にし、最初の記号をもたらす。それと同時に人間は、身体的欲求の現実から離れて広い意味での象徴であるイメージに捕えられることになる。つまり、ラカンが想像界から象徴界への移行期に原抑圧の出現を見るのに対し、Smith においては、その出現は想像界に入ることを意味する。

## 自 我

ラカンによれば、6－8ヶ月の子供は鏡あるいは他者の中に自己を認め、それまでの断片的な身体像から統一的な自己の身体像を獲得する。この鏡像段階は、自己と認めた像（虚像でしかないが）を「私」としてとらえる虚構あるいは欺瞞としての自我形成の段階、いいかえるなら、自分自身を鏡像に投射し、それを取り込む自己愛的同一視の段階である。

そのうえ子供がこの機会を利用して随意運動の面ではその時点でまだ完成されていないのに、精神面ですでに自分自身の機能的統一をわがものとしているという事実から、わたし自身はなにがすぐれた意義を引き出すことができると思ったのである。まさしくそこに心像による最初の取り込み作用「欺瞞」が認められるのである。（ラカン 1966：112）

このような自己愛的な二者関係に終止符をうち、自己現前と現実的な対象把握を可能にするのは、エディプス期を通して象徴の秩序に入ることによってである。言語は体験に対し距離を持った意味する者としての主体性の確立を可能にする。しかしながら、それは同時に生の体験からの乖離であり、言表された社会的な私（自我）と無意識に抑圧された現実の私との分離でもある。即ち、「自我とは存在の真実に完全に対立するものである。自我は個人の理想とするものの一切を、すなわち、個人がそうありたいと欲するものあるいはまだ個人がそうであると思っているものの一切を、自らのうちに凝集する。」（ルメール 1970：109）。ラカンにとっての自我は、いつわりの統合であり、それをまもるための防衛機制の働く審級である。真の「私」は他者の位置にある無意識の主体であり、「自我」ではない。「エスのあるところに自我をあらしめよ」というフロイドの言説は、人間の他律性、主体の脱中心性の自覚を促すものである。

以上のような自我についてのラカンの仮説は、その多くをフロイドのナルシシズムの記述に負っているように思える。

自我の発達は一時的ナルシシズムからある距離をとることによって成り立ち、そしてこの一次的ナルシシズムをふたたび獲得しようとする激しい努力を生み出す。このような隔離はリビドーを外部から強要された自我理想に、つまりこの理想を実現することによってえられる満足感に移動させることによって生じてくる。（フロイド著作集5，130-131）

Smithは、上のフロイドの記述には理想自我が脱落しており、それがラカンの自我心理学批判につながったと考えている。彼によれば、エディプス葛藤を解決することによってもたらされた自我は、決して想像界のものではない。理想自我が想像的關係様式を引きずっているのに対し、自我理想は象徴界の秩序に属する。エディプス期を通して主体は、自己の有限性、被支配性それに死を直視しそれを受容する。このとき以来、自我の活動は内的・外的世界の歪曲や否認によって危機から目をそらすナルシシズムの局面から現実検討や理想による自己批判へと重心を移す。

私は、危険なものあるいは欠如として目をそらしたものは結局全て直面し悲しまなければならないと仮定している。抑圧することが優勢なところでは抑圧されたものを追跡し探索する無意識的な自我の動きが始まる。自我は防衛の砦ではない。  
(Smith 1991 : 9)

Smith は、この自我心理学とラカンの間の自我についての論争は、正しいかどうかの問題ではなく、自我概念の定義の違いとして考えている。それは自我、エス、超自我の概念とラカンの現実界、想像界、象徴界の概念のどちらがより多くの事実を説明する実り豊かな概念であるのか、またフロイドへの回帰が自我心理学にあるのか深層心理学<sup>3</sup>にあるのかといった基本的な問題に関わっている。

#### 注1

フロイドにおいて快感原則の概念はかなり混乱している。その基本は興奮量をできるだけ低く、あるいは0にしようとする傾向とそれをできるだけある水準（恒常）に保とうとする傾向との混同にある。

快感原則は現実原則に対立するものとして記述されている。快感原則が幻覚的な欲求充足を求める性欲動の法則であるのに対し、現実原則は現実の対象を求める自我欲動の法則である。また内的エネルギーの自由な流出とその拘束・制止といった形で両法則の違いをとらえることは、快感原則に内的エネルギー0の法則を現実原則に恒常の法則を割り当てることになるかもしれない。

しかしながら、両原則ともに欲求充足の体験を再現しようとしている点で基本的には同じであると考えられる。

記憶像に出発して、外界による知覚同一性にいたるまではたつき続けるいっさいの複雑な思考活動は、結局のところはただ、経験上必要となったところの、願望充足への迂路を表現しているにすぎない。(フロイド著作集2, 465)

この記述は、結局内的エネルギーの拘束も最終的なエネルギーの完全解放を目指したものであり、現実原則が快感原則の修正であることを示している。

#### 注2

われわれは意識される表象が何によって意識されない表象から区別されるかがわかる。…意識される事象は、事物表象とそれに属する言語表象とふくみ無意識の表象はたんに事物表象だけなのである。(フロイド著作集6, 111)

#### 注3

この時以来、自我の研究が精神分析の研究として公認されるようになってきた。その頃から《深層心理学》すなわち《精神分析》とはいえなくなった。(A. フロイド 1936 : 5)

引用文献

- Freud, A. 1936 Das Ich Und Abwehrmechanismen Internationler Psychoanalyticher Verlag  
(外林大作訳 1958 自我と防衛 誠信書房)
- Freud, S. 1900 Die Traumdeutung  
(フロイド著作集2 1968 夢判断 人文書院)
- Freud, S. 1914 Zur Einführung des narziBmus  
(フロイド著作集5 1969 ナルシシズム入門 人文書院)
- Freud, S. 1915 Das UnbewuBte  
(フロイド著作集6 1970 無意識について 人文書院)
- Lacan, J. 1966 Ecrits Editions du Seuil  
(宮本・竹内・高橋・佐々木訳 1962 エクリ 弘文堂)
- Laplanche, J., & Pontalis, J.B. 1967 Vocabulaire de la Psychanalyse Presses Universitaires de France ; Paris  
(村上仁監訳 1977 精神分析用語辞典 みすず書房)
- Lemaire, A. 1970 Jacques Lacan Charles Dessart ; Bruxelles  
(長岡興樹訳 1983 ジャック・ラカン入門 弘文堂)
- Piaget, J. 1964 Six Études de Psychologie Éditions Gonthier ; Genève  
(滝沢武訳 1968 思考の心理学 みすず書房)
- Smith, J. H. 1991 Arguing with Lacan Yale University Press ; New Haven and London

(平成4年9月16日受理)